

日本劇作家大会2014 豊岡大会
コウノトリ新人戯曲賞 候補作品

『同窓会』

作
入海香織

登場人物

登美子

本戯曲は、日本劇作家大会2014豊岡大会において実施される「こののとりに短編戯曲賞」最終候補作品として書いたものです。

以下、ト書きと台詞のなかの（）部分は、リーディング上、演じる俳優の役作りのために書かれたものであり、実際リーディング時には、ト書きは読まないようにお願いいたします。

× × ×

ある日、豊岡高校14期卒業生の同窓会が豊岡で開かれた。

それは、全国に散らばった仲間たちが何年か年ぶりに集まる催しとなった。かつて高校生だった若者たちはいまやみな70歳を過ぎた老人となろうとしていたが、同窓生たちが集まると、昔話や現在の自慢話などに明け暮れ、みな高校生に戻ったのかのようにはしゃいだ。

そんななか、長らく東京にいて、豊岡での同窓会には来られなかった幸子が突然泣き出す。

周りの同級生たちはなぜ泣きだしたかわからない。

あわてて慰める、かつての親友、登美子。

バスに乗り、ジオパークに出かける時間となった。

しかし泣きやまない幸子。

このまま幸子をほおっておけない登美子。

登美子は、幸子とともに残り、幸子を落ち着かせる役を買って出た。

登美子と幸子のふたりを残し、他の同窓生たちはみなバスに乗り、先にジオパークツアーに出かけた。

登美子

（バスに乗った同級生たちに向かい）はい、このバスは先に行つて下さい。さっちゃんを落ち着かせてから、わたしらはふたりで後を追いかけます。ええ、大丈夫です。先に行つて下さい。

pg.

バスの扉閉まり、バス出発した気配。見送る登美子。

バスが、角を曲がり見えなくなるまで見送った。

幸子はバスが出たのもお構いなしに泣いている。

幸子のほうを振り返る登美子。

登美子

同窓会、楽しなかったん？久しぶりに皆の元気な顔見れたのに。

高校卒業してもう52年だもんなあ。半世紀も前だで、わたしが

高校生だったの。段々参加者も減ってきたけど、こうやって同級生

が寄って呑んで食べて、同窓会に来られるだけで幸せだなああ。

4

さっちゃん

見れば、幸子はまだ泣いている。

理由のわからぬ登美子はすこしだけイライラしている。

ため息をつく登美子。

登美子

さっちゃん、泣かんといてえな。……さっちゃん、わたしらあ、

だあれもそんなつもりはないんで。さっちゃんら都会に出た人らあ

を置いてきぼりするつもりはこれっぽっちもないんだがな。ほんま

なんで、わかってえな。わたしらはそんなつもりはないんだで

しかし、幸子は泣きやまない。

登美子、途方に暮れて

登美子　どう説明したらわかってもらえるのかなあ。あのね、さっきの話

もなあ、神山さんや大谷さんが東北に箱庭やお餅を届とんなくてそれにわたしらもちょっと応援させてもらってな。それが嬉しいって話しなんだがな。別に泣くような話ではないんだで

しかし、登美子、言いながら考える。

東京に行き、豊岡での同窓会にしばらくぶりに参加した幸子は、そんなことを全く知らない。

豊岡に残った同級生の盛り上がる話に、置いてきぼりをくらったと思っ
って、それで泣いたのではないか？

そう思い…

登美子　そうか…都会に出た人らあは、それも知らなかったんだもんなあ
ゝ。わたしらあ、別にさっちゃんを仲間外れにしようと思っただけ
ではないで。逆に、小さなことをいちいち知らせたら迷惑違うん
かなあと思ってなあ、これまで言わんかっただけなんで

幸子、登美子に向かい「豊岡を捨てたって思ってるでしょ？私たちが
もう豊岡とは関係のない人と思ってるのよ、だから、みんな意地悪し
て教えてくれないんでしょ」とますますいじける。

登美子は前日からの疲れと幸子へのいらだちできつい口調になる。

登美子　あのな、そんなことないで。わたしらあは、さっちゃんみたい

に都会に出なかった人を豊岡を捨てたとか、わたしらあと違うとか、pg. 関係ないって思ってたんで。∴考えてもみてえな、そんな暇やないで。わざとさっちゃんら都会に出なかった人にいじわるして秘密を作る理由どこにあるん？めんどくさいだけだがな。逆に、気がつかって言わなかっただけなんで。あれもこれも、みんな大したことなし。都会の人、巻き込むほどのもんじゃないんだし

と、言い訳を言いつのり、正当性を主張する登美子。

幸子、より悲しい顔をしている。

それを見て言いながら自ら気付く登美子

自分たちがそう思っていないなくても、幸子たちに秘密を作ってしまったのは登美子たちだと。

だが、幸子の気持ちにどう答えればよいのだろうか？

わからない。

恐る恐る幸子に尋ねてみる登美子

登美子　でも、それが逆に都会に出なかった人を傷つけとるんかなあ……わ

たし豊岡、離れた事ないでなあ。都会に出たさっちゃんらあの気持ち
ちがわかれへんのかもしれんけど

幸子、何かを見ている。

何を見ているのか、登美子は幸子の方を窺う。

どうやら、幸子は豊岡の風景をみて懐かしんでいるようだ。

登美子、微笑んで

登美子

なんでもない田舎の風景だろ…（それに強く反対する幸子）「そんなことない。世界中どこにいてもない、ここだけの、豊岡だけの風景。ここだけの特別よ。」（そうなんかなあ、そんなに特別なあ（と風景を見、特別なところを探そうとするが）いっつも当たり前にある風景だし、何が変わるわけでもなし…（幸子は登美子らの無神経を非難する。「豊岡は特別なのよ」と）そうか、そうかもしれへんなあ、わたしら、豊岡の人達は、豊岡に関心がなさすぎるかもしれないなあ

幸子、ニュースで豊岡のことをやっているのを見た時、どれほど嬉しいかということ話す。

登美子

さっちゃんらあ、豊岡を離れとんなる人らあには、ふるさが全国ニュースになるのも、そんなにうれしいことなんだわなあ。都会に出た人がふるさとを離れて、見る豊岡と豊岡に住んどるわたしらあが見る豊岡。そんなに違うんだなあ

間

登美子

さっちゃん…：…なんでそんなに豊岡はええの？

幸子の様子をうかがう間。

ゆっくりと幸子が答える。「登美子ちゃんたちがいるから」と。

登美子

（自分を指さし）わたし？え、なんで？

幸子、笑って、あるいは照れ隠しに怒って「なんでも」と返す。

pg.

登美子 さっちゃんにとっては、豊岡は、わたしらが居るでええん？…

同級生がおるでええってことなん？（さっきの風景を見て）この何でもない風景があるからええとこじゃなあて…

幸子は「この何でもない風景がええのは、登美子ちゃんら、みんながここにおるから、それは2つでセット。登美子ちゃんらの思い出がなかったら、どんな綺麗な風景やっても意味ないんで」というようなことを言う。

登美子 そうか、そうなんだな…でも、わたしにとって、ふるさとしていいイメージないわ、田舎だし、不便だし、子どもも帰って来たがれへんし…。いい思い出もあるけど、やな思い出もあるしな

8

幸子は言う。「でも、良い思い出だろうが、やな思い出だろうが、一緒に話せて笑える、そういうことを話しあえる友達がいる。それがどんなにうれしいことか、登美子ちゃんはわかれへん」

登美子 そうだな、たしかにそうだわ…ここにおったら、安心して話せる同級生が側に居るもんなあ。そんな大事なこと、あたりまえすぎて忘れとったんかもしれんわ

幸子は言う。「登美子ちゃん達がいる。だからあたしは豊岡が好きなのよ」

登美子　　そうなんかあ　私らが居るしけえかあ

登美子、昨晚の同窓会を思い出しながら

登美子　同級生はいつまでも高校の時のままだもんな　どこで会ってもあ

の時に戻っちゃうわ。え、さっちゃんもそうなん？　娘がなあ　町

でわたしが同級生に会って話しとったら、お母さん、高校生みたい

だったでって言うんだがな　なあ、同級生はええなあ

登美子、さっき幸子が言ったこと、「同級生がいるから豊岡が好き

んだ」というようなこと、ちょっとわかる。

登美子　そう考えると、都会に出なった、さっちゃんみたいな人にとって

だけでなく、こん土地にずっとおるわたしらあもそうだな、同級

生が元気に暮らしとるとこがふるさと　わたしはそのふるさとに

暮らしとるんだなあ

登美子、幸子の手を握る。

登美子　さっちゃん……（本気で謝る）さっちゃん、ほんまにごめんよ　わ

かってあげられへんかって、わたしは、さっちゃんの泣いて訴え

た気持ち、わかってあげられれへんで　ごめん

幸子、首を振る。

泣いたことを謝る。

そして、分かってもらったことを喜ぶ笑顔。

登美子も笑顔になる。

と、そこで、登美子のスマートフォンが鳴る。

登美子、見る。

先にバスで行った同窓生・大谷からの電話である。

登美子　大谷くんからだわ

と、スマートフォンに出る登美子。

登美子　もしもし、（大谷「さっちゃん泣きやんだんか？」）はい、もう大丈夫です。（幸子と2人で笑いあう）ふふふ（大谷「そうかそりゃよかった。登美子さん、まださっきと同じところおるよな？」）おんなじ所おりますよ。（大谷「そいじゃ、いまからバス向かわすから」）はい、そうですか、そしたら待っとります。

スマートフォンを切る。

登美子　バス、帰ってくるって　わたしらを迎えに。

間。

登美子　（空を見る）さっちゃん、覚えとる？部活で楽々浦に行った時、わたしらあだけバスに乗り遅れて歩いて帰ったの。（思い出して）途中で雨に降られて、バス停で雨宿りしただろ？　あの時みたいだなあ。どれくらい2人で居ったんかなあ。段々暗あなって怖か

ったがな。雨はやめへんし、玄武洞の近くだったで人通りもあれへんかったし。カッターの練習帰りだしけえに、疲れとったし

幸子が嬉しげにうなづく。

登美子

3回に1回は、川底の泥、掬うんだしけえ。下手だったって事だけどなあ（笑う）、疲れ果てて、道具を片付けて、バス乗り場に行ったら、バスあれへなんだもんなあ。わたしが力が抜けて泣きはじめたら、さっちゃんが歌、歌ってくれたなあ

登美子、円山川舟歌をうたう。

1、船の船頭衆はな　なに着て寝やる

舳（とも）を敷き寝の　かい枕

2、雨が降りやよいな　ザンザカ雨が

愛し殿御さんの　肩休め

3、八鹿　ここのかな　豊岡を下りや

明日は着きます　湯の島へ

登美子

大谷君が迎えに来てくれるまで、いっぱい歌ってしゃべって待つとったなあ、雨が上がるの。それも暗あなるで、帰ろうかって歩き出した後だったなあ　大谷君が大きい声で呼んでくれとったのに二人とも怖がって逃げてなあ。みんなの憧れだった大谷君ときっちゃん、うらやましかったなあ。大谷君は勉強もできたし、ポートもうまかったし、かっこよかったし。さっちゃんは歌が上手でええとこの御嬢さんで男子学生のマドンナだったなあ。大谷君も東京に行

って、さっちゃんも大阪に出て わたしは何か取り残された気がし
たわ。わたしらあ、幸せなんかなあゝって思ったわ わたしは都会
に出なかった人がほんと羨ましかったで

登美子の話を聞いて、幸子、自分が傷ついたことばかりを言っていた
自分を恥じる。

登美子には登美子の思いがある。

幸子、謝る。「登美子ちゃん、ごめん」

登美子 (驚いて) どうしたの、突然、謝らんといてよ。どうしたん？

幸子、首を振る。「わたし、自分だけが傷ついたつもりになっていた。

登美子ちゃんの思いなんて全然考えもしないで」言いながらまた泣き
始める。

登美子 (困って) ちょっと、また泣くう、せつかく……泣き虫のさっち

ゃん、嫌いだわ 泣かんといてえなあ

と、慰めているうちに登美子も泣けてくる。

「ごめなあ」「ごめんね」と言いながら抱き合いながら泣き始める
ふたり。

登美子 嫌いの裏返しは、好きなんだって、知っと思った？ 好きだしけえ

嫌いになるんだって (幸子が「大嫌いだったもの、豊岡」) な

あ、嫌いだったのになあ、だけど、大好きだなあ、(幸子「同級

生がいる豊岡が大好きよ、今 あたし」あたしも、同級生がお
る豊岡が大好きみたいだわ、今日わかった

バスがやってきた気配。

登美子 バスが来たで。さっちゃん、はよ涙、ふいて。(幸子「登美子ち

ゃんも」あ、わたしもか(と照れ笑う)泣き虫がもう一匹増えた
ら変だなあ

と、涙をぬぐう。

バスが停まった。

立ち上がる登美子。

登美子 ほな、さっちゃん、行こうか…

と、振り返ると、幸子いない。

ちよっと離れた場所で空を見上げている。

幸子「登美子ちゃん、みて、空、晴れてる！」

つられて登美子、空を見る。

登美子 ほんま、ええ天気だわ。よかったなあ、さっちゃん

と、幸子と登美子、並んで空を見上げている。

間。

バスから、大谷が下りてきて、2人を呼ぶ。

登美子 (幸子に向かい) 大谷くんが呼んだるで (大谷に向かい) いま行 pg.

きます!

幸子のほうを向き、手を差し出す。

登美子 おかえり、さっちゃん

幸子、笑って、その手をとる。

にっこり笑いあう登美子と幸子。

歩きだす。

(おわり)

※作品の著作権は作者に帰属します。無断での上演・掲載・配布は固くお断り申し上げます